

佛蘭西書巡覧 23

平山 弓月

『ポールとヴィルジニー』といえば、南海の孤島を舞台にした純愛物語を思い浮かべる。むろんその通りで、それなればこそ一部の酷評を尻目に、2世紀を超える年月を生き延びたのだろう。

朝比奈諒



猛暑の夏が去り、じっくりと味読する読書の秋が訪れました。今回はそこで、すでに古典の一つに数えられている純愛物語をご紹介します。

純愛物語などと言うと、なんとなく古臭いような感じがしますが、そんなことはありません。かのナポレオンが愛読したといわれる、『ポールとヴィルジニー』*Paul et Virginie*(1787)をお読みになればお分かりになりますが、現代でもなお色あせない感覚に心打たれるでしょう。

作者であるジャック＝アンリ・ベルナルダン・ドゥ・サンピエール *Jacques Henri Bernardin de Saint-Pierre*(1737-1814)は、フランス北部の港町ル・アーヴルに生れ、十二歳にして伯父の商船に乗り組みマルティニック島へと乗り出しました。ロビンソン・クルソーの物語を愛読していた彼としては当然の成り行きだったのでしょう。

しかし海上の世界とは決別し、さまざまな修行経験を経て、身に着けていた土木技師としてインド洋上のフランス島(現在のモーリス島)へと赴きます。この時の見聞が、『ポールとヴィルジニー』の背景として、克明に描写されています。

フランスに戻った彼は、1873年に『フランス島への旅』*Voyage à l'île de France*を公にし、百科全書派の面々の知遇を得ます。その後彼らから離れ、自然観からJ.J.ルッソーに共鳴し、第一の弟子となりました。

物語は、「私」が島で出会った一老人の昔語りの形式で進みます。

Les hommes ne veulent connaître que l'histoire des grands & des rois, qui ne sert à personne.

誰もかれも、高貴な人や王様の話だけを聞きたがるが、そんなもの誰の役に立ちもしない。

といった思いを持つ老人は、「私」の願いを入れて昔語りを始めます。二人の女性がこの島にやってきた事情から、それぞれが授かった、ポールとヴィルジニーと名付けられた子供たちの成長を物語ります。兄妹のように育てられた二人は、「文明」に汚されていない自然の中で、「文明」とは隔絶した環境で、健康に育ちます。「高貴な野蛮人」

という言葉がありますが、二人の子供たちは、よい意味でまさに自然児であるといえましょう。

しかし、娘の将来を慮り、ヴィルジニーの母は、追われるようにして後にしたフランスの疎遠になった叔母に、彼女の教育を託し送り出します。従順なヴィルジニーは、ポールや周囲の人々に別れを告げ、「文明」の世界へと旅立つのです。

ポールもヴィルジニーも、子供時代を脱し、すでに「愛」を識る年齢に達していましたし、結婚をも意識するようになっていました。ヴィルジニーに去られたポールに、かれらの支えとなっていた老人は「文明」国の事情を話し諭します。

« C'est qu'en Europe le travail des mains déshonore : on l'appelle travail mécanique. Celui même de la labourer la terre y est le plus méprisé de tous. Un artisan y est bien plus estimé qu'un paysan. »

「それは、ヨーロッパでは手を使う仕事が不名誉なこととされているからだ。それはメカニクな仕事と呼ばれる。土を耕す仕事などは何よりも蔑視されている。向こうでは職人のほうが農民よりはるかに尊敬されているのだよ。」
(朝比奈諒訳)

「文明」国フランスでしばしば見られた、金持ちの老貴族との結婚を、叔母から強要されたヴィルジニーはそれを拒絶し、ポールたちが待つ懐かしい島に戻ることであります。しかし折あしく嵐に襲われ、島を前にして彼女の乗る船は難破してしまいます。助かるために、着ている服を脱ぎ棄てるよう水夫が勧めても、ヨーロッパで身に着けた「文明」が裸になることを許さず、ヴィルジニーはついには死ぬこととなります。

目前でヴィルジニーを失ったポールたちは、悲嘆のあまり相次いで身罷ってしまいます。結局は「文明」なるものが悲劇を引き起こすこととなったのです。「純愛物語」の多くが、悲劇的な結末を迎えるのは何故なのでしょう。

(この稿をなすに朝比奈諒先生の著作のお世話になりました)

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)